news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2019 **100**

前川千帆《少女》1927（昭和２）
「特集 せんぱん ―前川千帆の版画―」展より

せんぱんさんのお仕事 in 和歌山

特集展示「せんぱん 前川千帆の版画」2019（令和元）年9月10日（火）–10月20日（日）より

図1　前川千帆《龍神》 1952（昭和27）
木版、紙　田辺市立美術館蔵

コレクション展2019–秋で特集した前川千帆（1888–1960）は、戦前の『読売新聞』等に漫画を連載して人気を博し、漫画界における先駆的存在として知られた人物である。2016（平成28）年に当館で開催した「動き出す！絵画」展でも紹介した現存する日本最古のアニメーション「なまくら刀」も千帆と幸内純一の共作といわれるもので、アニメの草創期に活動した人物としても近年注目されている[*1]。

一方で、彼は版画の世界でも活躍し、版画家の恩地孝四郎、平塚運一とともに「御三家」と呼ばれ、戦中には日本版画協会の理事長も務めた重要人物であった。しかし、展覧会でまとまって彼の作品が紹介されることは少なく、1977（昭和52）年にリッカー美術館で開催された「前川千帆名作展」が唯一の回顧展として挙げられる。今回の特集展示は当館所蔵品を中心にしたものであったが、これを機に、彼の画業を改めて調査した。

京都に生まれ、早くから東京を中心に活躍した千帆だが、全国各地を巡る中で、実は和歌山にも三度訪れていたことが明らかになった。千帆の晩年の代表作である温泉地に取材した情趣豊かな版画集『版画浴泉譜』シリーズ三作目の『続続版画浴泉譜』（1952年）では紀南の温泉を紹介しており、龍神温泉の宿（上御殿）でくつろぐ千帆自身の姿も見ることができる（図1）。また、千帆の遺稿となった紀行文も、奇しくも白浜をテーマとしたものであった[*2]。

今回、千帆が和歌山と浅からぬ縁を持つ作家であったとわかったが、はじめてこの地を訪れた際のエピソードを紹介したい。1926（大正15）年11月、千帆は、宮尾しげを、宍戸左行と漫画家三人で、「志摩から紀州の沿岸を見て来ようじやないか」と、伊勢から高野山まで旅行する。雑誌『婦女界』には、そのときの彼らによる紀行文が掲載されており、軽妙な漫画風の挿絵入りの文章は今見ても面白い[*3]。

和歌山を訪れた千帆は特に瀞峡を気に入ったようで、恐らくこのときのイメージを元に『新日本百景』シリーズのひとつとして版画作品にしている（図2）。本作では、瀞峡の中の「瀞八丁」と呼ばれる和歌山県新宮市、奈良県吉野郡十津川村、三重県熊野市にまたがる峡谷を進む一艘のプロペラ船が描かれる。瀞峡では1920（大正9）年からプロペラ船が運行しており、珍しいこの船は「飛行艇」と呼ばれ、瀞峡の観光名物となった（写真）。本作の船には赤い「〒」のマークも見えるが、郵便船としても運行し、周辺住民の生活を支えていたらしい。

『婦女界』の旅行記の中で、千帆一行と乗り合わせた客が言うには、この船はアメリカのプロペラ船に倣ったもので、浅瀬が多い瀞峡でも走行できるよう、船底に付いていたプロペラを櫓を組んで船尾に付けることで、独自に改良したものだったそうだ。この船上の巨大なプロペラは、けたたましい轟音を響かせ、千帆も同誌で下記のように綴る。

バタ〳〵バタ〳〵バタ〳〵、我が飛行艇の発動機の爆音だ、雷さんを背負ひ込んだ様なものだ。乗り合ひの衆と口を利いても何を云つたか判らない、手真似か筆談か眼と眼で話すより他ない。平常やりつけないから面倒臭くなつて判らなくても判つた様な顔をして話をすます。それでも我飛行艇は威勢よく大声を挙げて雨

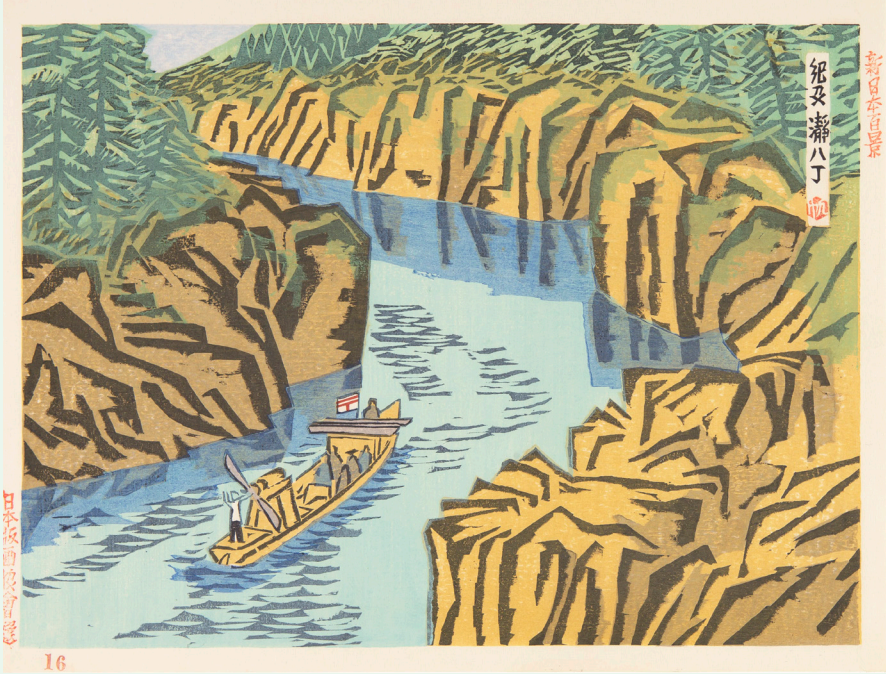


図2　前川千帆《『新日本百景』「瀞八丁」》1938（昭和13）　木版、紙　当館蔵

図3　前川千帆《新宮の磧より熊野川を遡るプロペラ船》（前川千帆、宍戸左行、宮尾しげを「漫画紀行 紀州廻りの旅枕」『婦女界』33-1、1926年1月に掲載）

煙る熊野の奥へ押し進んで行く。

この文章と一緒に掲載された千帆の挿絵（図3）は、雨の中猛進するプロペラ船をスピード感あふれるタッチでとらえている。この近代的な動感は、当時日本で盛んに取り上げられていた未来派をも思わせる。

千帆の作品には牧歌的なモチーフも多い一方、時おり近代的な機械文明への関心が垣間見える。ここでもプロペラ船というモチーフへの強い関心が版画と挿絵の両方で見てとれるが、それぞれ見比べると、その表現は全く違う。挿絵では船が大きくクローズアップされ、そのダイナミックな動きが強調されるのに対し、版画では悠大な自然の静寂が強調される。

漫画的な挿絵などと版画の表現特性の違いは千帆自身も意識していて、版木を介して表現する版画では、「中間に介在する材料の性質上、兎角（とかく）面が固定し動的なものに対して、より多く静的な表現に帰すると云ふ六ヶ敷（むつかし）さがある」、「版画は木質を削り取ると云ふ物的な操作が割合に困難な為めに、期せずして単純化が生れて来る。他の画の躍動自由な表現に対して、よく単化された荘重な表れが出て来る。精緻に対する簡素である」という[*4]。『新日本百景』のシリーズでは、千帆は若き日に見た朝鮮の金剛山に取材した作品も残しているが、いずれも版画の特性を生かして、自然のスケール感に主眼を置いたものといえる。今回の版画作品も、プロペラ船と瀞峡という一見ミスマッチに思えるモチーフを調和させ、機械の力を凌駕する自然の大きさを描き出すことに意を注いだのではないだろうか。

新聞社に所属する漫画家としてジャーナリズムの世界で育ち、常に新しい物事にアンテナを張っていた彼ならではの視点が、千帆作品のひとつの魅力として特筆される。漫画と版画という異なる特性を持つ表現媒体を駆使して、当時の暮らしや文化を自在に描き出した作家として、改めて見直されるべき人物だろう。

（藤本真名美）

絵葉書「（瀞峡の絶勝）下瀞峡遊覧のプロペラ船」 和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵

*1「にっぽんアニメーションことはじめ」展（2017年6月1日–7月2日：京都国際マンガミュージアム／2017年9月2日–12月3日：川崎市市民ミュージアム）など。
*2 前川千帆「温泉風物 白浜」『温泉』28–1、1961年1月。
*3 前川千帆、宍戸左行、宮尾しげを「漫画紀行 紀州廻りの旅枕」『婦女界』33-1–33-3、1926年1月–3月［国会図書館デジタルコレクションの「図書館送信資料」として公開されているため、和歌山県立図書館等で閲覧可能］。
*4 前川千帆「版画と素描の話」『素描新技法講座 第一巻 素描總論』1931年11月。

和歌山県庁舎建設80周年記念シンポジウム

和歌山県庁舎をつくった人びと（2）

2018（平成30）年12月24日（月） 14:00 ～ 16:30 和歌山県立近代美術館

前回に引き続き、シンポジウムの模様をお伝えします（和歌山県教育委員会文化遺産課 御船達雄）

【個別報告】つづき

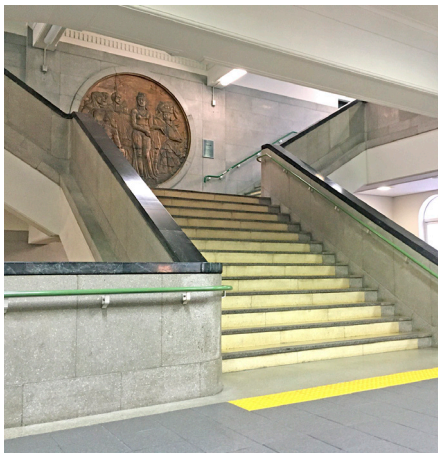
和歌山県庁舎の建築図面

河崎昌之（和歌山大学）

河崎昌之さんからは、和歌山県庁舎の建築図面についての報告がおこなわれました。シンポジウム会場の壁面には、建築図面4枚も展示されました。

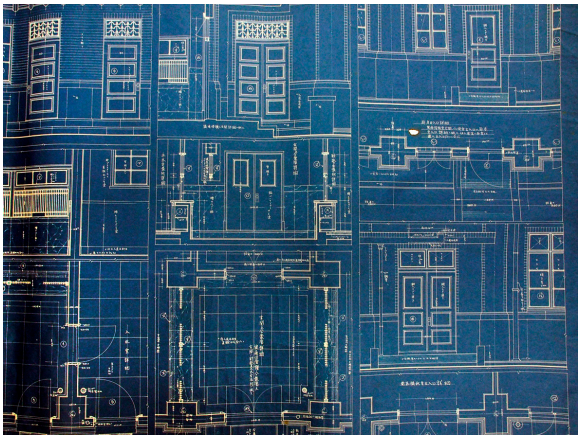
和歌山県庁舎の図面の存在を知ったのは、文化庁からの委託で日本建築学会が2014（平成26）年度に実施した近現代建築資料調査の時のことでした。この調査の和歌山県担当として、県内の近現代建築の図面や模型、写真などの所在調査を実施する過程で、県庁舎の図面に出会ったのでした。

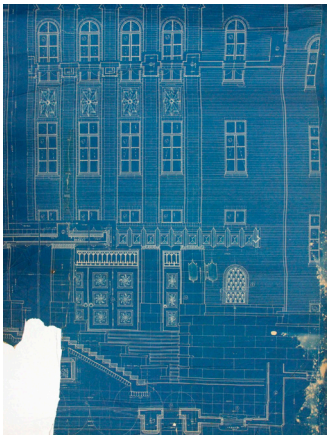
その後、県管財課に再度調査を依頼し、調べたところ、県庁舎の図面は大きく3種類に分けられることがわかりました。一つは青焼き図面で、これは平面図や立面図、断面図、各部の詳細図、及び配筋図を中心とした構造図からなっています。次に構造図の原図で、青焼き図面の構造図の元となったものです。最後にトレーシングペーパーにコピーされた第2原図です。これは青焼き図面を元に複写されたもので、建設後それなりの時間をおいて作られたもののようでした。恐らくこれまでの保守・管理の中で、作業用として作成されたものと推測されます。



県庁本館階段ホール

県庁管財課に残る図面群


開口部詳細図


玄関まわり詳細図

電気設備図や機械設備図はいまのところ見つかっていません。通常は記される、製図者、承認者のサイン及び製図日といった、通常記されるであろう製図にかかわる情報の記載が、いずれの図面にも見当たらないことと合わせて、留意したい点です。

図面サイズは、幾つか例外的なものもありますが、それぞれ約 100×80cm です。各図面には、図面番号と思われる1から77までの数字が振られていました。

しかし図面リストがなく、上の設備系の図面の有無が分からないことからも、この工事の中で描かれた正確な枚数など、全体像は不明です。このうち 45 から 77 までの数字が振られた図面が構造図でした。なお、既に知られていることですが、庁舎の構造設計の担当者が、後に東京大学教授となった，日本を代表する構造家である坪井善勝であることは、ここで改めて触れておきたいです。

製図は全て手描きで、烏口により線幅が描き分けられ、抑揚のある実に美しい図面表現となっています。同じく手による部屋の名称や仕様の書き込み、また線の疎密で面を描き分けるなど、入念な作業の痕跡を見ることができます。現代のコンピューターによる製図にはないその「味」、そして丁寧な仕事ぶりから伝わるのは、庁舎建設への設計者らの熱意です。それには設計に携わる者として背筋が伸びる思いでした。

図面の説明をする河崎昌之さん

全貌が明らかならずとも、県庁舎の図面が非常に重要な歴史資料であることは間違いありません。また力のこもった手仕事による図面は、芸術作品に通じる価値のあるものです。庁舎同様，県民の貴重な財産といえます。

県庁舎を飾った芸術家 保田龍門
井上芳子（和歌山県立近代美術館）

県庁舎本館のレリーフを手がけた保田龍門（1891–1965）は、彫刻や絵画に活躍した和歌山県出身の芸術家です。井上芳子さんからは、保田が特に建築に関連して手がけた仕事について報告がありました。

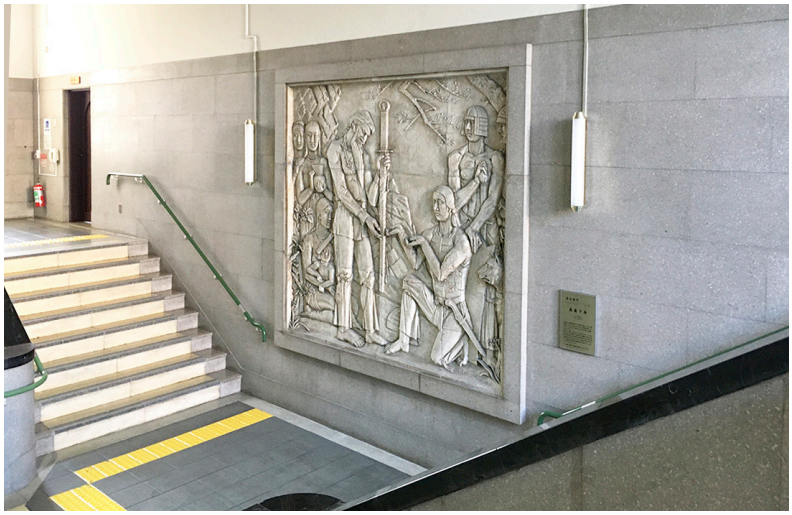
和歌山県庁舎本館には、保田が手がけた 2 面のレリーフが設置されています。2 階と 3 階の間の踊り場に設置された「丹生都比売命」のレリーフは、紀北にまつわる古事記に基づくもので、天照大神の妹である丹生都比売命が紀ノ川流域に降臨し、農耕を広めた様子が描かれています。自筆年譜によると、1939（昭和14）年、保田龍門が 48 歳の年の制作です。3 階と 4 階の間の踊り場に設置された「高倉下命」のレリーフは、東征の際、熊野の地で倒れた神武天皇に、高倉下が剣を献上する場面で、こちらは紀南地方に関わる古事記に基づいて制作されました。右下に「皇紀二千六百年　龍門作」と記されてあり、1940（昭和15）年に完成したものだと分かります。いずれのレリーフもセメントで制作されました。

保田の自筆年譜には、1939（昭和 14）年「和歌山縣庁々舎壁彫、「丹生都比賣命」「高倉下命」二面制作」とあります。1940（昭和 15)年 12 月には大阪市主催の「二千六百年奉祝綜合美術展」に「稲苗を植える」「霊剣を神武帝軍にさゝげる」として出品されています。制作から完成まで少なくとも 2 年に渡って手がけられたことが分かります。1938（昭和13）年に竣工した県庁舎の設計図面の中には、装飾枠が書かれているものの、レリーフの形状は赤鉛筆で追記されています。2 面のレリーフは建設当初の計画には無かったことが分かります。確かに、御船さんから教示いただいた竣工写真には、現在とは異なる装飾枠が設置されているのでした。そして現在、《高倉下命》を見ると中央の垂直線や左上から右下へ対角線といった特長的な構図が、階段の傾斜と角度を合わせられていて、階段ホールの空間を引き締める効果を果たしています。レリーフが県庁舎階段ホールの空間と一体を成しているように見えるのは、建設後にこの空間にあわせて制作されたことを物語っているように思います。

県庁舎への龍門のレリーフ設置と同じ 1940（昭和15）年、荒城季夫は「奉祝展の日本画を観る」（『アトリエ』1940 年 12 月号）という文章のなかで、長期戦争に突入している一方で、人々の芸術を鑑賞する心は急激に昂まりつつある、これはどういうことなのかと問います。戦争が拡大する中で、

《丹生都比売命》のレリーフ

《高倉下命》原型と保田龍門　1939 頃



階段ホールの《高倉下命》

芸術や文化にも国威発揚が盛り込まれていく時代でした。

保田は東京美術学校に進学、その頃の代表作として油彩画《自画像》や《母の像》などがあります。やがて彫刻を始め、フランスに留学してアントワーヌ・ブールデルに師事しました。西洋から戻ってきた後、保田は聖女や母子といったキリスト教的な人物像と日本の神話を研究し、洋の東西を超えた普遍的な題材を求めるようになりました。《丹生都比売命》《高倉下命》はこうした保田の姿勢をよく表しています。

和歌山の戦後建築に残る保田の作品では、紀陽銀行本店の正面外壁に設置された《春夏秋冬》があります。4 面のセメントによるレリーフに、和歌山の四大産業が表された大作です。

ほかに公共的な場に設置された重要な作品として、名古屋市郊外にある平和公園の平和堂があります。高さが 23 m あり墓地のシンボルとして建つこの供養塔の壁面や周囲に、保田の彫刻が陶にして取り付けられました。この墓地の建設を計画したのは、名古屋市助役を務めていた田淵寿郎（たぶち じゅろう）（1890-1974）です。田淵は戦災で疲弊した大都市名古屋の復興を進めるため、市街地の大胆な土地区画整理事業を行い、今の名古屋市街の骨格を造った人物です。100m 道路が有名ですが、その道路拡張のため、市内各所の寺院の墓地が平和公園に集められました。田淵は東京帝国大学出身の土木技術者で、名古屋の復興計画の前には、紀ノ川の改修工事も担当していました。保田が平和堂のレリーフを手がけたのは、田淵と保田が和歌山で旧知の間柄だったからだろうと推測できます。

名古屋市役所は 1933（昭和 8）年に竣工した荘重な近代建築ですが、階段踊り場に対抗する壁面に、保田の息子である保田春彦（やすだ はるひこ）が制作した《青春群像》（1954）が設置されています。日本美術院展覧会に出品されたもので、名古屋での展覧会の後、田淵の尽力で市役所に設置されたようです。この《青春群像》は、父龍門が紀陽銀行の《春夏秋冬》を当時の和歌山大学教育学部の構内、現在のこの和歌山県立近代美術館がある場所で制作していた時、その隣で制作したものだったそうです。

そして、県庁向かいの県民文化会館正面には、春彦の作品《死角のオブジェ》（1970）が設置されています。

井上さんは、保田親子２代の作品が、県庁とその周辺の景観を今も形作っているとまとめました。

紀陽銀行本店の正面

名古屋市平和公園平和堂

ICOM 京都大会 2019 を振り返って

今年 2019 年は、日本の博物館界にとって大きな出来事がありました。世界138の国と地域から博物館の専門家が参加する ICOM（国際博物館会議）の3年に一度の大会が、日本で初めて京都で開催されたのです。9月1日から7日までの一週間、国立京都国際会館をメイン会場に、「文化をつなぐミュージアム ―伝統を未来へ―」という大会テーマのもと、世界の博物館が抱える課題や目指すべき方向が議論され、各専門分野の動向などが意見交換されました。前回は 2016 年、ミラノで開かれた大会についてはその基調講演の様子を中心に、本誌『NEWS』88+87号でも報告しましたが、今回の京都大会はホスト国として、また筆者は美術の委員会 ICFA の運営委員として、その準備から関わることとなりました。

京都大会は、1948 年の第1回から数えて 25 回目にあたります。アジアでは 2004 年のソウル、2010 年の上海に続き、3カ国目です。パリに本部がある ICOM から見て極東の日本にどれだけの人が集まってくれるだろうかという懸念もありましたが、蓋を開けてみれば 4590 名という過去最高の参加者数となりました。

会期前半は基調講演やテーマを据えた全体セッションとともに、各委員会での研究発表が中心です。ICFA はこれまで、美術という分野であることから、また早くに設立された委員会であることからも、どうしてもヨーロッパ中心の議論になりがちでした。歴史的に欧米の学問では、アジアは「民族芸術」という扱いで、美術館での展示やコレクションの分類もそのようにされてきました。近年変化が見られるものの、大きな美術館では依然、アジア・アフリカ部門があります。

その状況を乗り越えるためにも、美術というひとつ屋根の下で、異なる地域の美術文化を捉えようというのが現在の ICFA の目標です。そのため、今回の京都大会はまさに好機で、「美術館における異文化：西洋とアジア（原題 Western Art in Asian Museums, Asian Art in Western Museums）」をテーマに、それぞれの展覧会やプロジェクトの事例を共有しました。また3日間の発表スケジュールの最終日

和歌山での CECA オフサイト・ミーティング

を工芸の委員会 ICDAD とガラスの委員会 GLASS との合同セッションとし、より幅広いメンバーとの交流の場を設けました。筆者も、先日当館で開催した「ミュシャと日本、日本とオルリク」展に関連して、20 世紀初頭の日本とドイツ語圏の版画の交流について発表しました。ちなみに、この展覧会に数多くの作品をお貸し出しくださったチェコ国立プラハ工芸美術館の館長が ICDAD の委員長でしたので、オルリクを中心としたこの展覧会の一側面を、図らずも直接お伝えする機会となりました。

各委員会の活動でもうひとつ大きな位置を占めるのが、オフサイト・ミーティングと呼ばれる視察です。せっかく様々な国のメンバーが集まるのだから、開催国の博物館を実際に見て学ぶというねらいがあります。ICFA は「コレクションと展示：東洋と西洋」というテーマを設定し、大阪市立美術館と国立国際美術館に協力を仰いで、コレクションを中心にした展示解説のほか、ディスカッションを通して日本の美術館の状況を知ってもらう場を設けました。

このように筆者は大阪にメンバーを率いていたのですが、実は、教育と文化活動の委員会 CECA が、和歌山をオフサイト・ミーティングの目的地としており、和歌山県立博物館を中心に、県立4館（近代美術館、紀伊風土記の丘、自然博物館）と文化遺産課、そして和歌山市立博物館も加わって、視察の受け入れを行いました。午前中には風土記の丘で実際に古墳を見て回り、午後には美術館・博物館に場所を移して、博物館のお身代わり仏像の取り組みや自然博物館の「移動水族館」、市立博物館のミニワークショップや当館の「なつやすみの美術館」展などを紹介しました。

しかし当日見てもらえる活動は限られているので、和歌山の博物館教育をより包括的に伝えるための冊子『まもって、そだてる　和歌山県の博物館活動』を発行し、全員に持って帰って役立ててもらえるようにしました。扱う資料の性質は違いますが、地方都市としての和歌山が抱える課題は何か、そのために博物館という場で何ができるのか、そこで人はどのように学ぶのかを振り返り、互いにアイデアを共有することを目指したものです。これは国内他地域の博物館にも送付し、今回の ICOM 大会の成果を、広く引き継いでいければと思っています。なおこの冊子はだれでも閲覧できるよう、関わった各館のウェブサイトで見られるように目下、準備しています。

もうひとつ、今回の大会で最も注目を集めたことを紹介しましょう。それは「博物館の定義改正」が議題に上がっていたことです。博物館の定義というのは、ICOM の活動のための様々なルールを定めた規約の中の一節を指します。1946 年当初から少しずつ修正が重ねられてきましたが、現在は 2007 年に採択された条文「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその

冊子『まもって、そだてる　和歌山県の博物館活動』

臨時総会の様子

環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関である。」がその定義となっています。これは日本の博物館法（1951年）に示されている「収集・保存、調査研究、展示・普及」という原則と大きな隔たりはありません。しかしこの定義を変更することを目指して2017年にMDPP（博物館の定義、見通しと可能性に関する委員会）が設置され、今年2019年の1月に改正案が発表されました。試みに日本語に訳してみると、以下のような内容です。

博物館は、民主化を促し、あらゆる人々を受け入れ、多様な声が響きあう空間であり、その目的は過去と未来についての批評的な対話である。現在の対立・紛争や課題を認識し、それらを具体的に記述することによって、博物館は人類の遺産や標本類を社会からの付託として保管し、未来の世代のために多様な記憶を保護するとともに、遺産への平等な権利とアクセスをすべての人々に保証する。

博物館は、営利を目的としない。博物館はすべての人が直接関わることができる、かつ公明正大な存在であり、人間の尊厳や社会の正義、全世界の平等と地球全体の幸福への寄与を目指して、多様なコミュニティとともに、また多様なコミュニティのために、積極的に連携・協力しながら、収集、保存、研究、解説、展示し、世界についての理解を広げる。

一読して、博物館の具体的な仕事を記述したこれまでのニュートラルな定義とは異なり、博物館が社会の中で積極的に果たすべき役割をかなり強い調子で述べていることがわかります。また過去と未来について触れることで、歴史認識の齟齬によって世界中で起こっている数多くの紛争に対し、「証拠」となる資料を保管する博物館の責任を示すとともに、「教育 education」という言葉が「解説（解釈）interpret」に置き換えられていることからも、歴史の正しい理解に寄与する必要性が高まっているようです。多様性への強い敬意も読み取れますし、「地球全体 planetary」という言葉は、人類が引き起こす環境問題によって、人間社会のみならず地球そのものへの影響が深刻化していることへの危機感の表れです。

1月にこの改正案が発表されると、各国や各委員会で様々な意見が噴出し、「これは定義ではない」といった反対意見も耳にしました。実際、今回の臨時総会では各国から、なぜ、どこに反対なのかが具体的に述べられましたが、最も説得力を持ったのは、新定義では困るのだという切実な訴えでした。というのは、日本の博物館法のように自国での博物館の活動を保証する文書を持たない国にとって、まずは収集・保存・展示といった基本的な活動が第一に記されたものがなければ、その活動が揺らいでしまうからです。民族紛争によって歴史遺産が破壊される危険に晒されているところでは、ともかくも遺産（資料）を守ることが何より大切で、あるいは独裁的な政権に脅かされている国では、民主化を目指すと明記するリスクもあるでしょう。この改正案が受け入れられる国は、これまでの定義があらためて示すまでもない「共通理解」として社会に受け止められている、安全な側にいる国なのだということを、強く感じました。

結局、時間も足りず、議論が不十分だとして採択は来年以降に見送られましたが、ここで書かれていることが、今世界が抱えている深刻な課題と博物館との関係を明示していることは確かですし、その問題意識が共有されたことには大きな意味があったと思います。上述した『まもって、そだてる』の冊子も、日本の地方都市が抱える問題を一種のケーススタディとして、各地域、各国に共有できるアイデアとしてまとめたものですが、博物館が社会の問題と切り離せないこと、そしてその解決に向けて博物館が取り組めることがあるはずだというメッセージを込めていました。

こうしてなんとか無事に会期を終えたICOM京都大会ですが、言語の壁もあり、まだまだ日本のメンバーは少ないのが現状です。筆者にとってICOMは、世界の博物館の状況を実際に学んで日々の仕事の糧とできる社会活動ですが、美術館だけでなくあらゆる種類の博物館と関わることで、美術館とは何かを相対的に考えることにも繋がっています。この活動に関わる日本の美術館の学芸員が少しでも増えてくれるよう、その意義を伝えていくと同時に、和歌山という「窓」から見える世界を、直接発信していきたいと思っています。　（青木加苗）

「保存」の話をしよう。

⑩作品の状態からわかること

「コレクション展 -2019 冬」に、和歌山ゆかりの日本画家、川端龍子（かわばた りゅうし）（1885-1966）の月毎のモチーフを描いた組作品が出品されているところをご覧になった方は、12 ヶ月分のはずなのに、1 ヶ月分足らないことにお気づきになったかもしれません。俳句に親しんでいる方なら、どの月がないかすぐにお分かりになるでしょう。

なぜでしょうか。それは、軸装が痛んでいて、展示しては危険だったからです。この作品は、12 幅の軸装された作品が、それぞれの箱に入り、さらにまとめて大きな漆塗りの箱におさめられているものですが、12 幅の軸の 1 本だけが痛んでいるのには理由がありそうです。

揃いの作品の状態がそれぞれちがうということは、制作の技術的な問題がないかぎり、保管と展示が原因でしょう。この作品の場合は、画面は申し分なく美しいのですが、画面のまわりの表具の部分に問題がありました。

軸は、それぞれのお宅に床の間があった時には、季節、集まりの趣旨や顔ぶれによって掛け替え、しまっておくときにはコンパクトな巻物になるたいへん便利なスタイルです。額縁に入っているより場所もとりませんし、軽くて扱いやすくもあります。しかし、布と紙でできていますので、扱いには注意と習熟が必要です。私も、上手な人に教えて貰って、さんざん練習しました。

取り扱い、あるいはハンドリングと呼ぶこともありますが、それは展示だけでなく保存のために必要な技術です。どのように取り扱えば安全か、考えてみてください。力加減はどのくらいが適当か、そのときの姿勢はどうであるべきか、美しく整ったすがたで納めることにも意味があります。

出品しなかった作品は、8 月の、蓮の間を水鳥が泳ぐ図です。蓮の葉には露が宿り、透き通った水とあいまって、夏の朝の涼しさを思わせる魅力的な作品です。きっと、もとの持ち主のところで、とくに何度も掛けて愛でられた一幅だったのでしょう。そう思って見直すと、展示できた 11 ヶ月分の軸の状態もそれぞれちがうことに気づきます。どの軸がお好きだったのか、分かるような気がします。そしてまた、表具に皺ができた作品でも、画面は無事で、布と紙でできた表具が取り扱いのダメージを吸収して、見事に画面を守っていることにも気づきます。

（植野比佐見）

「ニホンラシサを探せ」より川端龍子作品のコーナー

川端龍子《荷毛》制作年不詳　顔料、絹

巻いた状態の軸装

Museum Calendar

開館／9 時 30 分～ 17 時 00 分（入場は 16 時 30 分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

2020.1.4（土）–1.26（日）　コレクション名品選

清水登之《ヨコハマ・ナイト》1921

第 73 回和歌山県美術展覧会（県展）
2020.1.15（水）–1.19（日）

第 5 回和歌山県ジュニア美術展覧会（ジュニア県展）
2020.1.22（水）–1.26（日）

休館のおしらせ
2020 年 1 月 27 日（月）より
4 月下旬（予定）まで
照明工事のため休館します。

メールマガジン　Facebook　twitter　ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会　会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

入会のご案内

一般会員　6,000 円
学生会員　3,000 円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。
詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：中川

和歌山県立近代美術館ニュース　No.100
編集発行／和歌山県立近代美術館　〒 640-8137　和歌山市吹上 1-4-14
Tel.073-436-8690　Fax.073-436-1337　http://www.momaw.jp/
発 行 日／ 2019 年 12 月 27 日　デザイン／鶴田デザイン事務所　印刷／株式会社 協和

和歌山県立近代美術館